

---

# 警視庁自然型環境係

台風X号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

警視庁自然型環境係

### 【Nコード】

N6551K

### 【作者名】

台風X号

### 【あらすじ】

新感覚の事件解決は、自然を愛する刑事達とする。アイヴィス共和国の保護領になった日本に新たな風が吹き荒れる。自然は、証拠を隠すが真実は隠さない。それが矛盾していたとしても自然のやり方だ！

s e a s o n 1 - 1 結成(前書き)

難事件は、自然に悟ってしまえば簡単な事件になる。

2010年9月17日アイヴィス共和国領日本

「アイヴィス共和国政府は、日本を保護領にすると断言していますが事実ですか？」

マスコミ達が、首相に向かって言った。

弥識首相は、こう答えた。

「メーナズ大統領が、言った通りです。」

警視庁自然型環境係 play in

アイヴィス共和国の警察官たちがやってきた。

其れは、警視庁との国際会議である。

「我々の考えがまとまったので報告します。」

アイヴィス共和国連邦警視庁警視監総長ウィリアム・ローンドー

「警視庁自然型環境係。これはいい名前ですね。」

警視庁警視総監 このもとくにひで 丹元国英

「其のメンバーに、日本で瞑想で事件を解決する警察官が17名いると思います、探してみましたら、この人物達です。」



自然型環境係は、犯人を読み解くため、普通捜査を開始した。

芦原と坂井を置いて……

強盗事件捜査課は、新たな強盗事件を調べていた時、一人が白い粉を見つけた。

自然型環境係にも伝わった。

「白い粉は、覚せい剤と断定されているということとは。」

「今回の覚せい剤密輸事件と強盗事件は、何か関連性はあるのかな？」

15名は、新たな捜査展開を見せに戻った。

そして、捜査一課の秋村理秀あきむらみちひでと出会った。

「なんで、お前がいるんだよ。秋村！」

「ああ、いて不味いか自然型環境係の永平寺！」

二人の目線に、火花が散り始めた。

福井は、此の事を知っていた。

「またかよ！」

坂井は、ピンポン玉を投げて、二人の目線を通り過ぎるようにした。  
二人は、案の定ビビった。

秋村は、そそくさにその場を去った。

しばらく時間が経過したところで、覚せい剤密輸事件と強盗事件は、重なっているかを検討していた。

「犯人は、複数犯の可能性も視野に入れてみよう。」

「坂井と今立は、覚せい剤の量を気にしていたな。」

「最初、我々が見た時は、覚せい剤の量は、80gの量でした。」

「次に起こった、強盗事件にあった覚せい剤は、16g。」

若狭は、ひとつ気が付いた。

「大量に落ちていたということになりますよ。」

「となれば、瞑想するしかないな。」

瞑想捜査を始めた越前は、自然に今回の事件のことを悟った。

自然が語った事は、とんでもない真実だった。

「強盗事件が起こった後、その後、しくじったんでしょうか。覚せい剤を大量に落としてしまったんでしょう。いずれも、ダイヤモンドも落ちていました。場所を特定したら意外なところですよ。東京都

港区です。」

越前は、美浜を呼び、急いで東京都港区に行った。

港区のビルに、一人の人物が入って行った。

そのビルに入る前に、外に白い粉、覚せい剤をまたしても落とすとしていった。

越前と美浜は、到着した。

「玄関付近に、覚せい剤があったぞ。」

「と言うことは、此の中だな。急ぐぞ美浜。」

「はいっ！」

そして7階。

犯人を逮捕できた。

抵抗もなかったが、この結果、もうひとつの事件が絡み始めようとしていた。

「お前か、俺の友人が覚せい剤をしていると警察に通報したのは！」

「違つよお父さん。」

「五月蠅い。」



バシツという大きな音。

新たな事件が起こり始めようとしていた。

芦原と丹元は、会話をしていた。

「今回の事件は、ご苦労だった。」

「今回は、自然の手柄でもあり、永平寺と南越前のペアの手柄でもありますよ。」

「自然が事件を悟るとは、世の中の変わりを自然は知っているかな。」

「シャーロック・ホームズも、自然に悟って事件という紐を解いたと思いますよ。」

「それは、推測だろ。」

「そうですね推測です。」

福井と鯖江と敦賀は、美味しい店で楽しく、ラーメンを食べていた。

勝山は、全身あざだらけの子供に出会った。

新たな事件は、次回登場する。

s e a s o n 1 - 1 結成（後書き）

次回予告、s e a s o n 1 - 2 二つの事件とあざだらけの兄弟。  
お楽しみに。

season 1 - 2 二つの事件とあざだらけの兄弟(前書き)

前回の事件と関わる重大な事件とは？

勝山は、その子供から事件の香りがしていた。

「勝山警部、凄い情報ありがとうございます。」

「何沢警部なにさわも偉いですよ。DV&子供虐待事件捜査課を導入するのは。」

勝山と福井は、虐待事件の根源が何なのかを調べ始めた。

「刑事部長と生活安全部長に言われたよ。根源を調べるとね。」

「秋村、いい加減にしてくれ。」

「仕事増やすなどと、お前等は、虐待事件を調べているならそこからヒントほしいんだよ。こっちは其れに関連しそうな殺人事件を調べているんだよ。」

「秋村、その殺人事件と言うのは、何だ？」

「君達が保護した子供の母親だよ。」

「えっー！」

警視庁自然型環境係シーズン1 - 2

二つの事件とあざだらけの兄弟

その子の名前は、黒潮光太郎くろしおみつたろうという子で6歳の子供。

「この子の親、黒朝鮮子くろしおせんご、専業主婦ですね。」

「美浜は、何か嫌な感じはしませんか？」

今回の事件捜査は、美浜と今立の二人である。

「まつ、今立さんが心配しなくてもいいです。」

「美浜は、俺が今立の先輩だからと言って、今立さんとは言わなくてもいいんです。呼び捨てでもかまいません。」

10分が経過していた。

「美浜、さつき公園にいた子供にあざらしきものが。」

「分かった今立。」

一方、警視庁捜査一課ではまたしても永平寺と秋村が口喧嘩していた。

「永平寺、少しぐらいはヒントくれたっていいんだろ。」

「その態度が、ヒントあげないと言っているようなものだよー！」

捜査一課あがりかたともみつ巡査部長東方朝松は、溜め息をつきながらこうしゃべった。

「上司さん同士が口げんかしていると巡査部長である僕が、見苦しいですよ。」

二人の上司は、部下に言った。

「部下は、少し俺達上司の口げんかという雑音から逃げればいいんだよ。」

「すみません。」

一方、自然型環境係では、新しく保護した子供の名前を聞いていた。

「君の名前と何歳か教えて。」

「僕の名前は、黒潮堇くろしおまんざん漸です。4歳。」

南越前が、ハッと気付いた。

「この子、黒潮光太郎の弟だ。」

越前兄弟は、光太郎に話しかけた。

「君の友達は？」

「お父さんが、殺しました。」

越前兄弟は、光太郎が通っている幼稚園で行方不明になっている子供を質問していた。

「あー、ここの園児さんで行方不明になっている子は、3人です。」

「10人ですか。その子たちの名前は？」

「逆瀬川充さんさかせがわみつると林中妃呂子さんはやしなかひろこと紫雲寺邦政さんしじゆんじくにまきです。この子たち、黒潮さんが友達となった時以降、いなくなっただんです。ねえ貴方達警察でしょ。これは誘拐……」

「残念ながら殺人です。」

園長は、ふらついた。

「あつ、大丈夫ですか？」

越前の弟が、園長を椅子に座らせた。

そして、自然型環境係に戻った越前兄弟。

「やはり接点があつたのか。」

「殺人事件にも参加できるぞこれで。」

敦賀は瞑想捜査を始めた。

自然が言うには、根源は、2年前子供が余計に友達をほしがっていったことが原因らしい。しかし、絆の勉強させないのには、理由があり、その子の父親が覚せい剤を所持していることがばれたら、たまつたもんじゃないという推測。

敦賀は、その黒潮の父親のいる家へ行つた。

「黒潮色生くろしほこいひ。君だね。警視庁自然型環境係の坂井です。」

父親は、逃げた。

「敦賀と永平寺捕まえる！」

敦賀と永平寺は、色生を捕まえた。色生は、二人の子供に恨みを持つている感じで叫んだ。

「董漸、光太郎なんか俺が殺してやる。お前等の友達と妻を殺したみたいにな！」

坂井は色生に言った。

「貴方が、二人の子供の友達と黒朝鮮子を殺したと言いましたね。」

「もはや、否認はできませんよ。」

「友達と妻は、俺が殺しました。だって家に覚せい剤があるからです。妻は、噂話で、俺のことを言うし、二人の子供は、友達にお父さんは白い粉を飲んでいるみたいだよ。ってだから俺はこれ以上、大変な事態を防ぐ為に・・・」

「殺したというんですか。三つの事件に絡むなら刑はもの凄く重いものですよ。」

「其れに、貴方は、10年前の恐喝にも絡んでいましたよ。」

4時間後。

「自供しましたよ。あの夫は。」



福井が言った。

芦原は、福井に言った。

「とうとうより、あの夫の事件、4つも自然が解いていたとはすばらしい。」

芦原は、あることを思い出した。

「自然って、あり得ないな。」

山梨県北杜市の何処かで、ある警視と自然教信仰者が金の渡しあいをしていた。

この事件は、のちに大惨事を起こす。

その前に、変な事件が発生した。強盗事件である。

此の強盗事件だけは、器物を破損させることなく、逃げているときに人を殺害しているという。

season 1 - 2 二つの事件とあざだらけの兄弟(後書き)

次回、1 - 3、わけわからない強盗と殺人。お楽しみに

s e a s o n 1 - 3

わけわからない強盗と殺人(前書き)

今回は、ちょっとオカルト型の事件発生？

高浜と今立は、運動ジムで楽しそうに身体づくりをしていた。

「時には、ここで警官としての身体づくりもいいよな。」

「俺の場合は、2カ月に一回の常連と言っているからな。」

「なんじゃそりゃ。」

二人は、机の上に、丸い錠剤で、三角形の溝が刻み込まれていたものを見ていた。

今立は、気付いた。

「これ、ブツですよ。高浜さんさっき此処に白い錠剤らしきものを置いていた。」

「じゃ、早速捕まえます。」

「早く捕まえてくれ。俺は、ここら辺を探す。」

二人で一斉に、麻薬所持と公務執行妨害で逮捕した。

警視庁自然型環境係

season 1 - 3 わけわからない強盗と殺人

「いやーでかしたぞ。二人の麻薬所持犯を見つけるなんてさ。」

芦原が、ほめていた。

麻薬所持犯の証言から、奇妙なことを得た。

「どうやら、あの黒共、殺人事件を目撃したらしいんですよ。」

若狭が言った。

そこにかくれんぼしているように捜査一課の秋村が蛇のようにやってきた。

「うわっ、秋蛇！」

「永平寺、構うな。」

秋村は、もうひとつだけ有力な情報をあげに来た。

「其の事件は、非科学的強盗事件にもかかわっているらしいぜ。」

永平寺は、笑うようにいった。

「捜査一課の秋村、そんなオカルト事件なんて起こるかよ！」

「悪いな、しかしこれは本当だぜ。」

芦原は、越前の兄と鯖江に殺人事件の現場に行くよう命令した。

美浜と小浜は、強盗事件の現場に来ていた。

金銭を盗まれたところにいた従業員、あみのとりそり網野十四素利アイヴィス系日本人である。

「このことは、アイヴィス共和国でも可能な犯罪行為ですよ。」

「貴方は、前の宝石店もこんな方法で金銭を盗む事件があったということですね。」

「そうです。アイヴィス共和国連邦警視庁の特命係に連絡してみたらどうですか、ほかの課ではなかなか教えてくれなかったですよ。」

日本の特命係が、アイヴィス共和国の特命係と合併した時に、自然型環境係が発足した。

勝山と坂井は、其の事件を鑑識に知らせた結果、6年前にもこういっただけの事件があった。

「今回は、とてもヤバイヤマになりそうだな。」

越前の兄と鯖江は、殺人事件の現場の半径50メートルあたりを捜索していた。

「こんなところに、宝石がありました。」

「犯人が、しくじって落したんだろっな。」

鯖江は、越前の兄に言った。

「越前、大至急強盗事件が起こったところを捜査している美浜と小浜に連絡しろ！」

「分かりました。」

強盗事件を捜査している小浜に電話がかかった。

「小浜さん、殺害現場に宝石が一つ落ちてました。」

「俺の推理が当たった。」

携帯電話を閉じた小浜は、美浜に知らせに行った。

小浜は、鯖江に連絡を取った。

「鯖江君、犯人が分かりました。」

「えっ本当ですか？」

「名前は、蓮ヶ浦汲英はつがつひくみひでだそうです。従業員を恨み続けている人です。」

「どこに住んでいる？」

「殺害現場から300メートル離れたアパートです。」

「すぐ近くだ。分かりました。ありがとうございます小浜警部殿。」

鯖江は、携帯電話を閉じた。

越前の兄に300メートルの先のアパートを目指して走った。

アパートは、3階に蓮ヶ浦汲英のお宅があった。

鯖江と越前の兄は、そのお宅のチャイムを鳴らした。

「蓮ヶ浦だな。」

「そうですが。何か？」

「家宅搜索の令状で、二人で探す。」

「ちょっと困りますよ。」

越前の兄は、血の付いたナイフを見つけた。

鯖江は、宝石などの金銭を見つけた。

「ちょっと、署に行こうか。」

蓮ヶ浦は、素直に鯖江と越前の兄に連行された。

取り調べは、捜査一課が代わりにした。

「あいつが、宝石店の従業員になることを俺は認めていなかったのに、あいつは6年前になりやがった。最初は、ガラスケースを取り外してそこから宝石を盗んだ。しかし、彼はアイヴィス共和国で宝石店で働いていると聞いて、4か月前に針金でガラスケースに小さい穴を開けてそこから盗みました。」

若狭は、今回の手口と4か月前に起こった事件が同じであることは知っていた。



裏で、瞑想捜査をして、知らせたのである。

福井と永平寺は、神奈川県相模原市緑区に来ていた。

警視庁自然型環境係の代表として、警察発表会に出席した。

s e a s o n 1 - 3

わけわからない強盗と殺人（後書き）

次回予告 s e a s o n 1 - 4 自然の解明が教えた学校内での暴力  
事件。お楽しみに！

s e a s o n 1 - 4 自然の解明が教えた学校内での暴力事件（前書き）

現実にも有りそうな厄介な事件です。

season 1 - 4 自然の解明が教えた学校内での暴力事件

芦原と内村刑事部長は、レッドカウを二人で仲良く飲んでいた。

翌日の朝。

ある事件のことが、組織犯罪対策部組織犯罪対策1課に伝えられた。

警視庁自然型環境係

season 1 - 4 自然の解明が教えた学校内での暴力事件

南越前と永平寺と若狭と小浜が、事件現場に行った。

一人の女子生徒が胸を数回刺されていた。

「捜査一課も来ていたよ。」

しかし刃物が見つからなかった。

「自然型環境系の永平寺、貴様は来る場所じゃない。」

「うるさいね、芦原係長に言われてきたんだよ。」

若狭は、ある物を見つけた。

「これって、技術室に置いてある紙やすりです。」

音楽担任の巴坂教師が言った。

警部が二人に、警部補が一人に、巡査部長が一人と言った感覚は少しだけ違和感があるような感じである。

殺された女子生徒は、未紹<sup>みさう</sup>祐子<sup>ゆうこ</sup>中学3年生。

なぜか、3年8組の教室には、絆創膏や包帯を巻いている生徒がいた。

刑事部長と芦原係長は、あることを言っていた。

「もし其れが本当だとすると、教育委員会にも恥をさらすことになるだろう。」

「俺の仲間が、出した答えに自らケチをつけることはできませんが、真実だとしたらまずいですね。」

福井と越前の弟が、一人の保護者に出会った。

「警察官ですか、私の息子さん学校から帰ってきた時、先生に腹を殴られたと言ったの！数字担任の儷知<sup>ならちともま</sup>智磨<sup>ちま</sup>という先生に逮捕状を出して下さい。お願いします。」

福井はこの保護者の父親は、警備部の人だと知っている。

芦原係長は、不自然な空気を持った。

「儷知教師は、被疑者と言つことか？」

「そうです。」

「翌日に、勝山と美浜に儼知教師を任意動向、させますので心配しないで。」

「分かりました。」

翌日になった。

数学の担任の教師にアリバイすらもないため、任意動向から逮捕に踏み切ったがしかし共犯者がいた。

2人の生徒を殺したのは、自分ではないという言葉は、何なのか分からなかった。

美浜と大飯は、イライラしている教師を見つけた。

しかも中学1年生の男性の頭を校舎の壁にぶつけているところを確保した。

その教師は、教育委員会に言いつけようとしたが、教育委員会にも一人不快な人物がいた。

瞑想を開始した大野は、自然に此の事件の全てを聞いた。

「もう一人の犯人がいました。教育委員会の鶴喜ツルキという人物です。しかも二人の教師を恐喝しているということが、自然の解明となりそうです。」

自然の解明は、悪魔の照明をぶち破る最強の真実をもたらすのにとってもよい力。

芦原係長は、坂井と永平寺を呼び出した。

教育委員会の一人は、話した。

「子供に、暴力的な方法で教えると言っただけです。当り前じゃないですか。子供は死ぬ思いでいるんなことを・・・」

坂井は怒鳴った。

「当り前じゃありません。貴方の志向は二人の教師の人生を殺人と言っただけで染めた最悪な方です。そんなあなたに教育委員会にいる資格などありません！」

教育委員会の一人、鶴喜は、恐喝罪で逮捕された。

芦原係長と刑事部長は、楽しそうに将棋をしている。

「事件解決に、踏み切るに至って素晴らしい功績です。」

「捜査一課も情報屋がいたからありがたく思っておいてくれ。」

「まっ、犯人に王手をかける。というよりこちらも王手になってますよ。」

「参りました。」

敦賀は、まだこの事件は終了しきってないと考えていた。

一方、ある晩に新たな事件が起こっていた。

大野は、新たなオカルト事件を知り始めた。

次回 season 1 - 5 魂を撃ち殺した！とても変な器物破  
損事件



s e a s o n 1 - 4 自然の解明が教えた学校内での暴力事件（後書き）

次回もお楽しみに

s e a s o n 1 - 5 魂を撃ち殺した！とても変な器物破壊事件（前書き）

さあ、妙な事件が発生。

Season 1 - 5 魂を撃ち殺した！とても変な器物破損事件

Season 1 - 5 魂を撃ち殺した！とても変な器物破損事件

警視庁自然型環境係

芦原係長は、福井と鯖江と大野を呼び出していた。

「君達が、捕まえ損ねた、覚せい剤取締りのホシは、生活安全部が捕まえたそうだ。惜しいところに突かれたのはしょうがないですよ。」

生活安全部長から自然型環境係に来てほしいという命令が下った。

猫を改造銃で撃ち殺したという通報があった。

今回は、勝山と越前の兄がやってきた。

「事件現場は、このお宅の裏庭ですか。」

「このお宅、みやけじまりよしすけ三宅島亮輔さんがこのお宅の主です。」

「家族構成は、6人家族とペット1匹。そのペットが今こんな状態になってしまった。何か変ですね。」

勝山の携帯電話に着信が届いた。

「勝山です。なにっ、ホシの一人が、自首してきた！分かったすぐに我々で取り調べします。」

越前の兄もびつくりした表情で事件現場を去った。

しかし、もう一人のホシが、二人の刑事が去ることを知って、三宅島の家に忍び入った。

取調室にいる二人は、最初にホシの名前を知った。

「兎鞍由松うさくらよしまつという名前だね。警察は、ホシや重要参考人などの名前を手つ取り早く知る必要性がありますので、もう一回だけ自己紹介させました。」

生活安全部の一人は、ある事を口にした。

「ホシが言った。猫の魂を撃ち殺したという供述しています。」

「俺は、引っかかりですよ。猫の魂を撃ち殺してしまったって、オカルト事件じゃないですか。」

勝山は、何か嫌な予感を感じ取っていた。

芦原係長は、敦賀と大飯を呼び出して三宅島の家に行く命令を出した。

三宅島の家に、一人の人物がいたことを目撃した敦賀は、大飯を呼び出して追いかけ始めた。

「不法侵入と公務執行妨害で逮捕！」

「午後3時21分です。」

二人は、息を切らしながら言った。

「どうやら、もう一つだけ謎が残っていた。」

魂を銃で撃ち殺すという件だ。

芦原係長も其れを気にしていた。

「係長も、わけのわからないオカルト事件を信じるんですか？」

「事実、俺は内村刑事部長と当時の階級では、刑事部長が警部で、俺が警部補だった頃、不起訴になってしまったオカルト型殺人事件があった。犯人は、違う事件で起訴されたけどね。」

魂をどうやったら撃ち殺せるのかは、全く分からないが、一人は、器物損壊。もう一人は、不法侵入と公務執行妨害。そしてもう一人の犯人像があった。

それは、三宅島松次郎<sup>みやけしましやうじろう</sup>である。

亮輔の孫にあたり、二男。

長男の行方が分からないでいた。

しかし、奥多摩で腹を6か所刺されたことから、何か嫌な予感がしていた。

「生活安全部から外れて、翌日から刑事部に一時配属決定となった。」

今立と大野は、捜査二課の御代智森みしろともひさ巡査部長と会話していた。

「確かに、魂を撃ち殺すなんてあり得ないな。」

「科捜研に相談してみますか？」

「お願いします。」

翌日、自然型環境係は、刑事部に一時的配属された。

「刑事部長から、7日以内に事件を捜査一課と共に行動してほしいと言われた。永平寺と小浜は、三宅島さんの家に行つて来てくれ。」

長男の御遺体が確認されたと報告した後、二男を探す事、そして二男のアリバイがないなら捜査一課に報告すること。いいかい？」

芦原係長は、刑事部長からの任務を生き生きと喋った。

永平寺と小浜は、母親が悲しんでいる様子を見ていた。

「犯人は、一体誰なんだ。」

父親は、そのように言ったら、小浜が言った。

「実は、とても言い辛いんですが、三宅島みやけしまかずひさ万久さん。貴方の御二男です。しかも代々受け継ぐ帽子が、無くなっていたんです。」

「そんなバカな！」

一方、勝山と大飯は捜査一課とともに、二男の任意同行しようとし

ていたが、ある一人の人物が妨害したため、混乱した。

「辻藍庸喜つじらんようきを早く捕まえろ、俺達は、三宅島万久を捕まえるから。」  
捜査一課と大飯は、辻藍。勝山と合流した永平寺と小浜は、三宅島を探した。

辻藍は、公務執行妨害で捕まり、三宅島は、殺人容疑で捕まえた。

二男は、帽子を持っていた。

事件は、複雑さを決めていたが自然に聞いた途端、簡単になっていった。

自然型環境系の行動は、刑事部長も喜びをあふれ出していた。

芦原係長は、刑事部長にあることを言った。

「特命係が、見抜けることができなかつた殺人事件があることが、坂井警部補が、瞑想で出したそうです。刑事部の配属の延期をお願いしていますか・・・」

「杉下の見抜けることができなかつた殺人事件何だそれは？」

「詳しいことは、不明ですが、自然が言っているなら真実です。」

「延期してやるう。1か月と2週間と3日ぐらいでどうだ。」

「ありがとうございます。刑事部長。昔では伝説の相棒。」

「昔か、懐かしい。」

アイヴィス共和国連邦警視庁刑事部捜査一課は、謎の記号と殺害現場を見ていた。

「ひどい有様だな。」

「ケン・ムメーカか、被害者の中で一番の最年少。17歳。そして謎の記号は、31番Gaと書かれた血文字で。」

「特命係の田原とタートルマウンテン！」

「るせえ、捜査一課のデビット！」

田原は、手で頭を押さえた。ダメだこりゃと思っている。

次回予告

「芹沢、自然型環境係面白いな。」

「おもしろいですね。」

「秋村は永平寺と犬猿の仲だろ。おれはな亀吉と犬猿の仲なんだよ。」

「変に認めなくても・・・痛っ！」

次回 警視庁自然型環境係 season1-6 新たなる平成の切り裂きジャック出現！アイヴィス共和国と日本が大混乱スペシャル



「太郎ソフトで、言うと14ページ分の大スペシャル。楽しく見たいね。」

「伊丹さんも見る気があるんだ。」

「永平寺、お前は、引っ込んでいろ！」

season 1 - 5 魂を撃ち殺した！とても変な器物破損事件（後書き）

ごちゃごちゃな複雑感がありました。自然に事件を悟らせると複雑になりやすそうです。次回予告を追加しました。

season 1 - 6

新たな平成の切り裂きジャック出現！アイヴィス井

スペシャル登場。とても長いのでそう解釈してください。

警視庁自然型環境係

Season 1 - 6

新たなる平成の切り裂きジャック出現！

アイヴィス共和国と日本が大混乱スペシャル

6年前、特命係に杉下右京だけになっていた頃、ある事件が見過ごされていた。

最初は、八丈島で起こった。8人のを殺すという、連続猟奇殺人事件。

その時に、1から8番の謎の記号が書かれていた。

9人目と10人目は、別の犯人が首を絞め殺した場所は、北海道札幌市。そこで確認された記号は、FとNeという。文字が出ていた。

それ以降も、厄介な事件が起こっていた。

そして今回は、31人目の被害者である。

勝山は、理由があつて、千葉県野田市のマンションで2人暮らしの夫婦が出てこないことに変だと思つてやってきた。

そして、殺害事件が起こっていた。夫は、刺殺。妻は、手首を縛つて、溺殺されていた。しかも、妻のほうには、Asと書かれた文字があつた。

捜査一課秋村とその仲間は、34から38人目の被害者を確認した。

「とんだ、殺したがり屋だな。」

「S r って書いてあります。」

アイヴィス共和国では39から41人目の被害者が出ていた。

アイヴィス共和国連邦警視庁特命係には、サンフランシスコ・フロリダ第二警部。彼は、アイヴィス共和国連邦警視庁の杉下右京と呼ばれている。

もちろん本人もいるが。

田原久四郎たはらくしろうた太警部補、彼は、特命係でも、若干冷静でしかも天然な者である。

アイヴィス共和国は、日本を保護領にする前、サルウィンサルウィンを保護領にした。

その時に、アイヴィス共和国の大統領は、ある夫婦を知っていた。

そう亀山夫婦のことである。

アイヴィス共和国も、亀山薫の行動をととも気に入っていた。

日本が保護領となった時、小野田官房長に、アイヴィス共和国連邦警視庁官房副長フランク・ボリヴェミアが、色々と聞き出してこういうことを言った。

「復帰、させて見せませんか？」

「復帰！それはどういうこと？」

「サルウィンと言う国、我々が保護領にしていたんです。」

「そうなの、知らなかった。」

「知らなくても無理はありません。日本にその情報が伝わるには、かなり時間がかかりましたから。」

「亀山薫君は、良いね。」

「何ですか？」

「貴方達の連邦警視庁の特命係に配属出来ないかしら？」

「良いでしょう。日本の警視庁は、アイヴィス共和国の警察にとつては、州と省の警視庁と同じクラスですから。上のランクになりま  
すね。」

「配属は、いつ頃かしら？」

「配属は、4月12日になります。」

日本の特命係と合併後、杉下右京第一警部と神戸尊警部補が加わった。

亀山薫は、日本警視庁時代では、巡査部長であったが、連邦警視庁で警部予備という階級を得た。

アイヴィス共和国連邦警視庁新特命係の5人は、自然型環境係同様、此の連続殺人事件を調査しに日本に向かっていた。

その間に42人目の被害者が出た。M0と書かれていた。

自然型環境係も全員現場に急行した。

芦原係長は、刑事部長と一緒に緊急捜査本部に来ていた。

「芦原警視、お前も凄く斬新だな。」

「刑事部長もですよ。アイヴィス共和国の捜査一課と合同捜査なんて。」

大野と坂井と南越前は、練馬区と西東京市と埼玉県蕨市を見回り始めた。

「アイヴィス共和国の捜査一課も来ているのは知っていたが、二人って、杉下警部と神戸警部補！」

大野が叫んだ。

「更には、警察を復帰したという噂は本当だったんだ。亀山の奴。」

あとの二人は、見られない顔である。

大野達は、新特命係と合流した。

「亀山さん、びっくりしましたよ。まさか連邦警視庁で復帰をした

から。」

「今じゃ、警部予備という警部補より上の階級に出世したとは驚きです。」

一方、鯖江と伊丹と芹沢と三浦と永平寺は、町田市と八王子市を捜索していた。

「見つからないのかよ。」

「というより、犯人気付いていたとしたら？」

アイヴィス共和国連邦警視庁刑事部長シャーノ・ナプロ警視令は、刑事部長と芦原係長に出会った。

「我々の捜査に、新特命係が来ているとは聞いてないぞ。」

「何かと役に立つかもしれないよ。彼らも。」

捜査一課の6人から通信が入った。

「静岡県伊豆の国市で、43人目と44人目の被害者を確認そして、TcとRuと書かれていました。」

また、大飯と勝山から通信が入った。

「神奈川県鎌倉市に、45番目の被害者確認。文字は書かれていません。」

芦原係長は、組織犯罪対策部第三課と第五課に要請をとった。



埼玉県蕨市に来た、大野達と新特命係は、犯人が今、女性を襲おうとしていた。

「女性を放しやがれー！」

大野達は、犯人と女性を引き離した。

「ただいま、一人目を確保しました。」

歓喜に包まれたが、またしても予期せぬ事態が発生。

「46人目と47人目の被害者確認。しかも国会議員。一つの文字を確認した。A gと書かれています。」

一人の容疑者に事情聴取した。

「俺は、闇サイトで女性を2人と男性1人を殺したんだよ。」

「闇サイトの正体を暴いたのは、鑑識の一人、もりのなかくんしろう森野中勲一郎警部補だ。闇サイトの正体は、貴方も浅倉禄郎になってみませんか?という闇サイトでした。」

米沢が言った。

自然型環境係の一人、今立は、あることに気付いた。

「浅倉禄郎って、あの平成の切り裂きジャックですか?」

芦原係長は、焦りを見せていた。

闇サイトで、浅倉禄郎を知る人物はそこらじゅうにいる。

サイトを細かに見ているシャーノ・ナブロ警視令は、ある物を確認した。

「内村部長、これを見てください。」

「ナブロ警視令、どうした。」

「分かりました、意外な人物、前に浅倉禄郎を一番憎んでいる。沖縄県警の一人であったことがわかりました。」

「なら、沖縄県警の一人が誰なのかを探れ。徹底的にな。」

「はっ！」

捜査二課は、特別行動をとった。

48人目と49人目の被害者が出てしまった。

芦原係長は、内村刑事部長を自らの場所に呼んだ。

「芦原警視、どうした。」

「今回、まずいことになりかけています。犯人が複数化し始めていることがそもそもの原因なら、沖縄県警にいるその者、許もとかくあきら霍彰あきら巡查長をアイヴィス共和国の警察に任したらどうでしょうか？」

「お前も、ズル賢くなったな。」

「恐縮です！」

永平寺は、新たな情報を得た。

「係長、もう一人の犯人を見つけました。27名を殺害した、れん簾葎多計夫にらたけおという容疑者です。瞑想で27人の殺害を考えていることを知りました。」

「今の場所は？」

鯖江の瞑想により、現在地が特定できた。

「長野県松本市の松本城にいます。」

内村刑事部長は、そこには捜査一課の秋村がいることを知っている。

「秋村、松本城の中に、簾葎がいるそいつを現行犯逮捕しろ！」

「了解しました。」

秋村は、仲間の三人と一緒に松本城に入った。

そして、松本城で、現行犯逮捕した。

「松本城にいるなんて、ラッキーだったぜ。」

まだ一人残っている。

19人を殺害した犯人がまだいた。そのものは、アイヴィス共和国

にいた。

「なんであいつが、アイヴィス共和国にいるんだよ。」

アイヴィス共和国には、捜査一課と捜査二課と家庭問題対策部のメンバーが半分だけいたことが、不幸中の幸いであった。

「名前は、あみまこと羅孝古朗です。」

みんなは、ホツとしていたがまだ沖縄県警の一人が残っていた。

此处で、一つ解説しておこう。先程、家庭問題対策部とは、アイヴィス共和国連邦警視庁や州と省警視庁に存在する生活安全部から独立した所轄。この所轄で取り扱うのは、DVや児童虐待や高齢者虐待や離婚による口論型の暴力を扱う所轄。特に日本の警視庁も噂では、これに近い所轄を設立しようと考えているようである。

アイヴィス共和国は、すごい国である。

しばらく時が経った。

秋村と伊丹は、あることを口にしていた。

「沖縄県警の許霍彰がアイヴィス共和国の警視庁に逮捕されたそうだけ。」

「全く信じられねえよ。」

自然型環境係も芦原係長意外全員が、納得のいかない表情となっていた。

それもそのはず、時間を巻き戻すと分かる。

三人の殺人犯が逮捕されて、残すは違法サイトを作った許霍彰巡查長を捕まえることである。

しかし居場所が分からない。

どうやって見つけるつもりなのか？

「許霍の奴、どこにいるんだ！」

鯖江は、イライラしていた。

日本の警察には、情報を与えるのは、解決から3日後に。

つと内村部長は、ナプロ警視令に言った。

「了解しました。是非、三日後に。」

「厳密に言つと78時間後だ。」

「と言いますと？」

「こちらにも、面白くない事情があるからな。」

「分かりました。」

アイヴィス共和国の連邦警視庁刑事部長は、頭を悩ませていた。

「新特命係に、行動とらせてやるつ。彼らには、少しだけ助かっていかな。」

新特命係は、刑事部からのSOSを聞きいれた。

ナプロ警視令は、そついいながらも困ることがあつた。

サンフランシスコ・フロリダ第二警部は、杉下右京同様「変人」扱いを受けていた。しかし、アイヴィス共和国連邦警視庁特命係を急速的に成長させたということでも有名となつた。ナプロ警視令は、フロリダ第二警部の行動を支持しながらも少し邪魔な存在として見ている面がよくある。

田原と神戸は、許霍彰巡查長の居場所を模索していた。

警部補同士で探しまくつていた。

亀山と杉下は、日本のある場所に来ていた。

「福井県にいるのかよ。許霍つていうやつは？」

亀山は、文句を言つていた。

田原は、福井県越前海岸に許霍巡查長がいることを確認した。

「亀山さん、杉下第一警部に変わつてくれませんか？」

「右京さん。田原からです。」

「田原さん何か分かりましたか？」

「許霍巡查長の場所、分かりました。今も移動中ですが、行きそう  
なところも特定できました。滋賀県長浜市旧西浅井町だと分かりま  
した。」

「とてもよい情報、ありがとうございます。」

杉下は、急いで車に乗った。

「右京さん？」

「僕の推測ですが、許霍巡查長は、琵琶湖で自らの罪を洗い流す可  
能性があります。」

「ということは、まずいですね。」

「行きましょう！」

フロリダは、滋賀県で捜査していた。

杉下から電話がかかってきた。

「あ、杉下さんなにかご用ですか？」

「はさみうち作戦と行きます。フロリダさん西浅井に行ってください。」

「滋賀県西浅井、ここからだと近いです。」

「急いで西浅井に行ってください。」

「分かりました。」

神戸は、少しだけある情報を手に入れた。

「許霍巡查長は、刑事になる前、日本にある自然型環境係の一員になりそうなくらいまで瞑想で事件を解決しているということですか。」

「しかし、定員が18名ですでに決まっているので瞑想刑事としてけなされると勘違いされて闇サイトを作ったとしたら、これって最悪な事件じゃないか！」

田原は、びっくりしていた。

神戸も田原の意見に少し驚いていた。

滋賀県西浅井、許霍巡查長は、琵琶湖に入ろうとしたところをフロリダ第二警部に捕まった。

そのあと、杉下と亀山も来た。

「福井県警と滋賀県警が覆面パトカーを借りさせてくれたおかげで助かりましたよ。」

「許霍巡查長、自らが犯した罪を水で洗い流すなど我々は許しません。」

「貴方のような刑事が闇サイトを作るなんて、どういうことですか？」



「警視庁自然型環境係結成のための試験に合格したのに、警視総監は、無視してアイヴィス共和国の池田と言う刑事に決定した。そのせいで俺は、瞑想で闇サイトを創り上げて、平成の切り裂きジャックの続編を創り上げようと考えた。結局それも新特命係と自然型環境係の力によって止められた。更には、闇サイトは沖縄県警に消去された。お前等のせいだ！」

杉下は、冷静な言葉が次第に激昂していった。

「許霍巡查長、貴方の行動が、50人近い人々を殺したと同じです。貴方は、3人の犯人を利用した平静で最大の切り裂きジャックですよ！」

許霍巡查長は、アイヴィス共和国のワシントン省警視庁で取り調べを行った。

小野田官房長は、少し興奮していた。

「さすがに、官房長も少し興奮しておりますな。」

「君も興奮しすぎに注意しないといずれ芦原と組んでいたところに犯してしまった冤罪事件をまた行うはめになるよ。」

内村刑事部長は、反論しようとしたが黙った。

大河内は、許霍を懲戒免職にした。

「これが妥当の案ですか。」

大河内は、少しだけ愚痴を言いながら、ラムネを食べた。

そして、三日後になった。

秋村と伊丹は、あることを口にしていた。

「沖縄県警の許霍彰がアイヴィス共和国の警視庁に逮捕されたそう  
だぜ。」

「全く信じられねえよ。」

自然型環境係も芦原係長意外全員が、納得のいかない表情となっていた。

芦原係長は、内村刑事部長に話に行った。

「それなら、納得はできますがー。」

「芦原警視、お前は俺と伝説の相棒時代、やってはならない冤罪事件をしてしまったことは、知っているな。」

「過去の話ですよ。」

「官房長が知っていた。」

「しょうがありませんよ！彼はとてもお強い方ですよ。」

芦原係長からネタばらしがあつて自然型環境係はホツとしていた。

新特命係も刑事部長に呼ばれたが、アイヴィス共和国連邦警視庁の

大きな貢献として休暇を貰った。

日本では謹慎処分の対象になることだが、アイヴィス共和国では、謹慎と言うことではなく、貢献ということで休暇を貰うことができる。時には、給料が一時的に高くなることも。

「今回は、2週間の休暇ですね右京さん。」

神戸は、嬉しそうな感じで言った。

「2週間と言うと近くにチェスの道場みたいなのがありますね。」

「はい、ありますね。」

「一緒にチェスを鍛えましょうか？」

「良いですね。楽しみましょう右京さん。」

フロリダ第二警部と原田と亀山もこの休暇を利用していた。

芦原係長は、大河内と話し合っていた。

「冤罪事件、昔そんな大胆すぎるヤマがありましたね。」

「其の事件のせいで、俺と内村刑事部長は、伝説の相棒をやめることを決意したんだ。その時は、証拠不足過ぎる部分を欠如しながら捜査していたから結局冤罪になってしまった。」

「確かに、あの事件は、警視庁の恥さらしと呼ばれ我々を赤面書か

される事件でもありましたね。」

其の事件のおかげで、警視庁は進化した。

永平寺は、芹沢と一緒にそばを食べていた。

「おいしいですね、此のそば。」

「捜査一課の伊丹よりも俺が結構、おいしい蕎麦屋さん知ってるんだな。」

というより此の事件が、終わったことは良いように見えた。

しかし六年前から、自然型環境係を導入することを考えていたらしい。

その結果、このような事件が起こってしまったことは、再び警視庁を進化に導かせることになった。

次回予告

「4日ずつ、10万円を要求しろ！」

「こんなモンスターペアレント初めてですね。」

「恐喝に更には殺人がつくとはな！」

「難題を解くのが自然型環境係の仕事だよ。」

「解けるもんなら解いてみるよ、永平寺。」

次回 警視庁自然型環境係 season1-7 狙われた教師と  
殺された生徒の保護者

「今回こそ、永平寺には登場しないでいただきたい。」

「うるさい、この秋村は。」

「ダメだこりゃ。」

s e a s o n 1 - 6

新たなる平成の切り裂きジャック出現！アイヴィス井

次回もお楽しみに



season1-7 狙われた教師と殺された生徒の保護者

すがすがしい夏の陽気、というより最高気温が34度と蒸し暑かった。

美浜と敦賀は、かき氷を食べていた。

「いやーやっぱり暑い夏には、かき氷合っなあー！」

「美浜警部補もそう思いますか？」

「当たり前だろ、暑い夏に涼の気持ちでないとな。」

敦賀の携帯電話に着信がかかってきた。

「おや、一体誰からだろ？芦原係長から電話がかかってきた。」

芦原係長の電話を敦賀が出て、通話をした。

「美浜警部補、芦原係長からの電話で事件発生ですって、しかも刑事部に5日間の配属決定が下されました。」

警視庁自然型環境係 season1-7 狙われた教師と殺された生徒の保護者

殺害現場は、廃墟公園である。

芹沢と秋村と伊丹は、事件現場を見回すと自然型環境係の2人が来ることに気付く。



「おやおや、いつも御苦労さまですね。坂井警部補と永平寺警部補  
」

「永平寺、構うな。」

鑑識の一人に会って殺害された人を聞こうとした。

「和田鍋錦さんという保護者です。死因は、左腹をナイフで一突き  
ですね。」

和田鍋輝尊わたなへてるぞんの母親で、父親とは絶縁関係であった。

「ママを殺したのは、いじめっ子の父親。」

永平寺は、和田鍋の口から意外な言葉を吐いた。

「いじめっ子の名前は、里久萩煤りくへいづみという子。父親が僕のクラスの先  
生に脅かしを作っていた。」

そのあと、和田鍋は泣き始めた。

警視庁に戻った永平寺と坂井は、組織犯罪対策部の角田課長と一緒に  
里久萩煤の父親が誰なのかを探していた。

「前科に覚せい剤密輸容疑で逮捕されているとは。」

「前科？」

「殺人と恐喝の容疑が固まっているんですよ。この里久能亜りくのあという

やつは！令状を出さないとな・・・」

小浜と越前の弟は、和田鍋のクラスの先生、はつかいしりこ白海史利子という教師は、死んだ目をしていた。

「里久能亜という方は、私を電話で恐喝してきましたんです。4日ずつ10万円要求すれば、うちの子の暴走は止まるんだ。10万円渡さないなら、学校を火の海にしてやる！つと脅されて私は、教師を本日付けで辞めることを決意してしまいました。」

自然というのは、残酷である。被疑者が必死になって隠した闇を白日の下にさらしてしまうのだから。

小浜は、美浜に電話をかけた。

美浜は、ポケットの中から携帯電話を取り出した。

「もしもし、小浜ですが。」

「小浜警部、何か情報をつかんだのですか？」

「美浜君にピッタリな情報です。」

3分間会話した後、美浜は、電話を切った。

美浜と大野は、里久能亜のいる家を張り込みしていた。

「まだいないから、もう少し待つぞ。」

炎天下の中での張り込みは、体力消耗がかなりきつい。

大野は、美浜と自分のために、交差点から70メートル先の自動販売機で天然水を購入した。

「美浜警部補、天然水です。」

「サンキュー、大野。」

張り込みすること5時間が経過した。

外が少し暗くなっていた。

チャイムは1時間前になったため、鳥の帰る音などが聞こえた。

大野は、美浜に里久能亜が帰ってきたことを言った。

「里久能亜だな！」

「何だね、君達は？」

「警察だよ。お前が一番嫌いな警察。」

「警察が、俺に何の用ですか？」

「逮捕状があるのはなぜだと思いますか？」

「何って？知らないね。」

「お前、殺人と恐喝をしたんだって言っているんだ。詳しくは署まで行きますよ。」

「アリバイがあるのに？」

「ないんだよ。お前にピッタリなアリバイが一つもなかったんだよ。」

署でも、少し騒いでいた。

芦原警視は、内村刑事部長に会いに行った。

「君達の部下が、良い活躍してくれたではないか。」

「美浜と大野は、良いコンビですから。」

中園は、芦原とあることを話していた。

「なるほど、一度芹沢と大野を組ましてみたいと。部長はどう思いますか？」

「お前の提案は、素晴らしいぞ。中園」

「それほどでは・・・」

それから2日間経過した。

芦原警視は、ある疑問視を抱いていた。

「伝説の相棒を大野と美浜に受け継がせるという考えができるのではないのだろうか？いや、まだ実力が未知数だ！此処は、私が監視しまくってやるうじゃないか！」

鯖江は一人の人物と出会った。

それは、鯖江がかつていた宮城県警の生活安全部の毛嫌い野郎だった。

「懐かしい、しかし事件のにおいがする。」

次回予告

「宮城県警の生活安全部の毛嫌い野郎って誰？」

「しかも、何かヤバそうな空気がしているぞ。」

「此の空気に惑わされずに頑張るしかない。」

「今回は、横領事件になりそうだ。」

次回 警視庁自然型環境係 season11-8 毛嫌いされた警部補

「これは、面白くて見逃せません。」

s e a s o n 1 - 7 狙われた教師と殺された生徒の保護者（後書き）

次回も見てね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6551k/>

---

警視庁自然型環境係

2011年6月28日00時52分発行